

10月27日に、福島市内の小学校で、福島市教育委員会研究委託校研究発表会があった。教室に参観者が入ったの公開授業である。徐々にコロナ前に戻ってきている。とはいっても、人数制限があった。私が担当する小学6年生は、参加者名簿によると18名だった。

6年生の教室には、1学期にもお邪魔していた。『風切るつばさ』の国語の授業だった。そのときは感じなかったのだが、今回は、大人の参観者が10数名入ると、狭いと感じた。子どもの数を数えてみた。33人もいた。今の時代では、マックスである。

授業が終了し、全体会があり、その後、授業が行われた教室で分科会となった。黒板には、授業の板書が、そのまま残っている。これがよい。自評があり、質疑となった。司会は、同じ学区の中学校の保健体育の先生である。1学期の際にも、授業後の協議会で司会を務めていただいた。そのときもそうだったが、今回も、司会をしながら、一度だけご自分で考えを述べられた。その中身がよかった。

質疑になり、質問が出るかどうかで、その後の分科会の方向性が決まることがある。司会者からすると、不安に思う瞬間である。すぐに、ある先生が口火を切ってくくださった。その質問がよかった。この質問が、約30分間の協議が向かうべき方向を示したように思う。その後は、司会者が心配することなどなく、次から次へと質問や意見が出た。

問題は、その中身である。これがよかった。その一つ一つをじっくり取り上げたいくらいだった。授業者からすると、質問されて困るような内容が多かったはずである。このくらいでよい。例えば、「『なぜ、太一は、瀬の主をうたなかつたのだろうか。』というめあてに対する先生のお考えを聞かせてください」という質問が出た。核心を突く質問である。実は、このことがあいまいなまま授業をやっている場合が多い。だから、子どもからいい考えが出てきても、切り返したり、他の子どもに聞いたりするコーディネートができない。子どもの方が深い読みができる場合がよくある。

この質問については、授業者の考えを聞いた後、参加者からそれぞれの考えを聞いてもよいくらいである。あるいは、授業をやってみたら、こんな考えが子どもから出たという報告でもいいだろう。私の場合はというと、『海のいのち』を読む度に、自分の考えが変わってきている。そんなことでいいのですかと言われそうである。このようなことは『海のいのち』のような定番教材では、よく起きることである。『ごんぎつね』も同様である。

教科書を見ると、「物語が自分に最も強く語りかけてきたことを考える」とある。ということは、読む人によって違うと言うことである。主題における読者論である。授業では、子どもが根拠と理由を明確にして、私はこう読むということが書ければいいのではなからうか。一人一人違ってはいても、ある一定の幅、枠に収まるはずである。

子どもは、自分の考えをもてることで、「読めた」という達成感、成就感、満足感をもつことができる。そして、次の文学作品に向き合うことができる。あるいは、自分の読書生活へと向かうことができるようになる。子どもが、自分の考えをもてるようにする、読めるようにするのが、国語の授業である。

この分科会では、20分というもち時間をオーバーしてしまった。授業と同じで、どんなに中身がよかったとしても時間通りに終わらないのはダメである。授業を参観しての指導助言も、これが最後になるだろうという思いがあり、調子に乗ってしまったわけではないのだが、申し訳なかった。いつものように、学校に帰る道すがら、落ち込んだ。

今回の分科会は、中身がよかった。参加者の皆さんに感謝したい。ありがとうございました。皆さんの国語の授業が、さらに充実していき、子どもたちが力をつけていくことを願っています。